

ラヴェル：クーブランの墓

タイトルの「クーブラン」とは、宮廷文化華やかかなりし 18 世紀のフランスの作曲家、フランソワ・クーブラン（1668-1733）を指している。フランソワ・クーブランは、ルイ 14 世のために作曲した《王のコンセール》をはじめとする典雅な室内楽曲や、繊細優美なクラヴサン（チェンバロ）曲集などで音楽家クーブラン一族の頂点を築いた人だが、200 年後のモーリス・ラヴェル（1875-1937）にとっても偉大な存在だった。「…の墓」という表現は、尊敬する故人への思いをこめた曲のタイトルとして使われる。

ただし、ラヴェル自身によれば、この曲はフランソワ・クーブランのみならず、18 世紀フランス音楽へのオマージュ（賛辞）であるという。偉大な古典への尊敬の念は、ラヴェルら近代フランスの作曲家たちに共通するものであった。また、当時クーブランの曲集などバロック音楽の楽譜出版が進められていたことも、古典への関心をいっそう高めた。

一方、《クーブランの墓》には、もう一つの大切なメッセージがこめられていた。それは戦争に命を捧げた友人たちへの哀悼の念である。ラヴェルは第一次世界大戦でトラック輸送兵として従軍していたが、戦争中の 1914 年から 1917 年にかけて 6 曲からなるピアノのための組曲《クーブランの墓》を書き上げ、各曲を亡くなった友人たちの思い出に捧げた。クーブランの衣をまとったこの作品には、ラヴェルの深い悲しみが隠されていたのである。

ピアノ版の初演が成功してまもない 1919 年、ラヴェルはその中から 4 曲を抜粋してオーケストラ用に編曲した。初演は 1920 年パリで行われ、バレエ化もされて人気を博した。4 つの曲は、クーブラン時代の組曲のスタイルをまねて、プレリュード（前奏曲）と 3 つの舞曲で構成されている。したがって形式は古風だが、旋律や和音、楽器の音色などすべてにラヴェルの新鮮な感覚が宿っている。

1 プレリュード：ヴィフ（生き生きと活発に）、ホ短調。クラヴサン曲のように細かな動きをもつ主旋律は、オーボエがひとしきり吹いた後、様々な楽器に受け渡されていく。装飾音もクーブランの時代を思い出させる。

2 フォルラーヌ：アレグレット（やや速く）、ホ短調。付点リズムの主題を、弦や木管が交代で受け持つ。典雅さに不協和音のスパイスが加わった、洒落た味わいの音楽。

3 メヌエット：アレグロ・モデラート（ほどよく速く）、ト長調。クーブラン時代のフランス宮廷で流行した 3 拍子の舞曲メヌエットに、ラヴェルは極上のメロディを与えた。主旋律を奏でるのは、またもやオーボエである。

4 リゴドン：アセ・ヴィフ（とても速く）ハ長調。南仏プロヴァンス起源の舞曲、リゴドンによる 2 拍子の快活な音楽。中間部ではオーボエがひなびた旋律を奏でる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。